

2) スプレーカーネーションの二年切り栽培技術

北海道立 花・野菜技術センター 研究部 花き科、道南農業試験場 研究部 作物科

1. 試験のねらい

カーネーションは通常は1年しか採花しないが、同一株から2年にわたって採花する「二年切り栽培法」の導入により、1年あたりの種苗コストを従来の半分に低減できる。しかし採花2年目の株の仕立て法について、これまで道内での知見がない。

今回の報告では、道内のスプレーカーネーション二年切り栽培技術に関して採花2年目の切り花品質、収量及び作業性を明らかにし、春植え作型では高品質で長期出荷可能な仕立て法を、秋植え作型では採花1年目と同程度以上の収量・品質で省力な仕立て法を提示する。

2. 試験の方法

- (1) 供試品種：「バーバラ」（草勢；強、花色；セリースピンク）、「チェリーテッシノ」（草勢；弱、花色セリースピンク/白）
- (2) 春植え作型 ①採花1年目の耕種概要：4月下旬定植、4本仕立てとし8月以降採花、11月に未採花枝を整理し微加温(最低2℃)越冬、②試験処理区(採花2年目の仕立て法)：切り戻し位置(無、5cm、20cm)、1回半摘心(有、無)
- (3) 秋植え作型 ①採花1年目の耕種概要：11月上旬定植、1回半摘心栽培により6月から8本採花、11月に未採花枝を整理し二重被覆加温(最低5℃越冬)、②試験処理区(採花2年目の仕立て法)：切り戻し時期(1月、2月)、切り戻し位置(10cm、20cm、30cm)、1番花整理法(芽整理、枝整理)

3. 試験結果

春植え作型

- (1) 採花2年目の春の切り戻し位置については20cm及び5cmより切り戻し無で規格内収量が多かった(図1)。
- (2) 採花2年目に1回半摘心を行うことにより採花のピークを分散化することができ、採花1年目よりも早い7月から8月に採花することが

できた(図2)。

- (3) 採花2年目の春に切り戻しを行わず1番花の芽整理を行い、1回半摘心栽培を実施することで、規格内収量が多くなった。また、採花1年目と組み合わせることにより長期出荷が可能であった(図1、2)。

秋植え作型

- (4) 採花2年目の切り戻し時期について、2月は1月より規格内収量が減少した(図3)。切り戻し位置は、10cm及び30cmより20cmで規格内収量が増加する傾向がみられた(図4)。
- (5) 1番花整理法では、枝整理が芽整理より規格内収量が多く、仕立て作業時間は短かった(図5)。
- (6) 採花2年目の1月に20cmで切り戻しを行い、前年枝を整理することで規格内収量が多く(図3、4、5)、仕立て作業時間も短かった。この仕立て法により、採花1年目に比べ切り花長及び有効花蕾数はやや減少するが、上位規格(2L+L)及び規格内収量は増加した(図3)。
- (7) 以上より春植え及び秋植え作型の二年切り栽培における、収量性の優れた採花2年目の仕立て法を図6に提示した。

4. 成果の活用面と留意点

- (1) スプレーカーネーション二年切り栽培導入時の資料とする。
- (2) 本試験は春植え作型を滝川市で、秋植え作型を北斗市で実施した。

用語解説

春植え作型と秋植え作型：春植え作型は道央地域を中心に全道的に行われている作型であり、秋植え作型は比較的温暖な道南地域で行われている作型である。

- 1回半摘心：伸長途中の1番花の枝の先を摘除し、わき芽を伸長させて新しい枝(1.5番花)とする方法である。

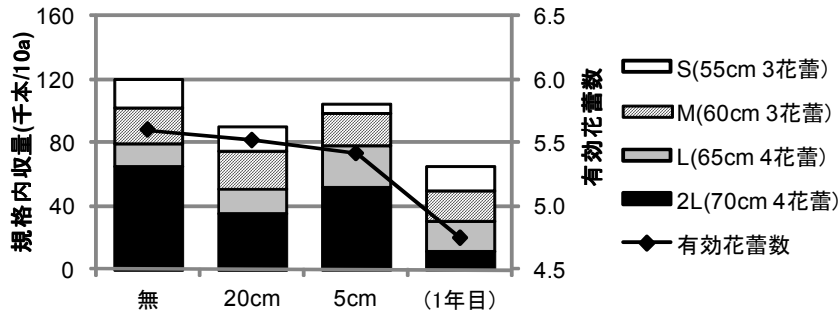


図1 春植え採花2年目の切り戻し位置が収量及び有効花蕾数に及ぼす影響(バーバラ)

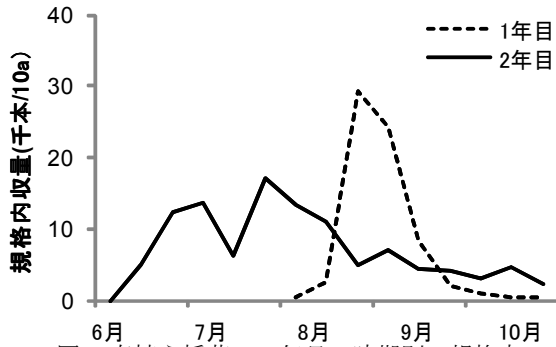


図2 春植え採花1~2年目の時期別・規格内収量(バーバラ)
注) 採花2年目は1回半摘心を実施

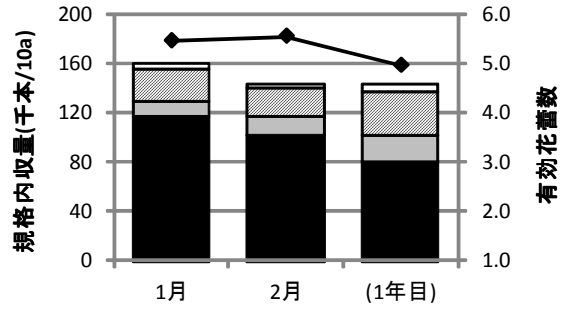


図3 秋植え採花2年目の切り戻し時期が収量及び有効花蕾数に及ぼす影響(バーバラ)
注) 凡例は図1参照

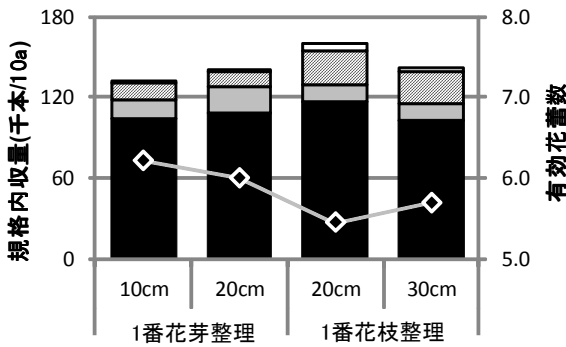


図4 秋植え採花2年目の切り戻し位置が収量及び有効花蕾数に及ぼす影響(バーバラ)
注) 凡例は図1参照

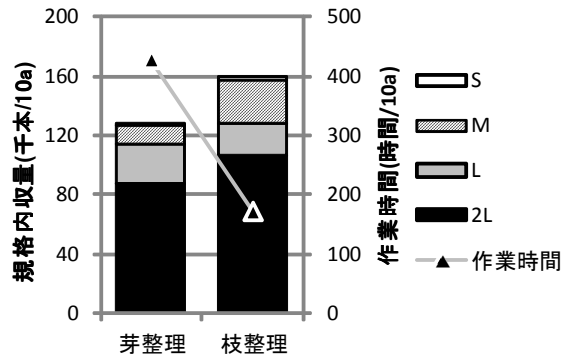


図5 秋植え採花2年目の1番花整理法が収量及び作業時間に及ぼす影響(バーバラ)
注) 規格は図1凡例参照

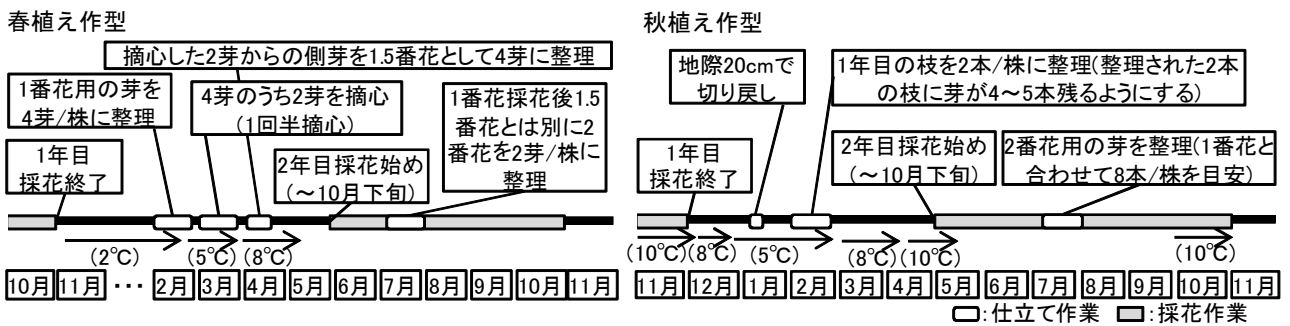


図6 二年切り栽培採花2年目における仕立て法

注) 矢印及びその下の括弧内は試験実施時における加温時期及びハウス内最低温度を示す